

どの小説を読んでも、どんな悲しいことを述べたものでも、いかにみじめな話が書かれたものでも楽しい気持ちになる」と評している。

晩年松川事件で、それこそ身命を賭ける論争をした広津のことを想う。
広津自身の言葉に耳を傾けよう。

私は菊池君の人間としての好きも、その頭の明敏さも、無愛想な表情の裏側にあつい人情を隠している事も、いろいろ彼の美点を感じてはいたが、しかし何処か一点に反発するものを持っていた。それは気質的なものに違いなかった。

しかし広津も、意見の相違を超えて、この菊池寛という人物を愛していた事が、わかる気がする。芥川竜之介、近松秋江、志賀直哉など同時代の作家たちが鮮やかに描かれているこうした書物は貴重である。大正期の作家たちの教養は主として英文学を基にしている。近代化を論ずる場合に見逃してはならないことである。

今の若い人たちがいかに書物から遠ざかっていることか。心配な面がある。教師として自らをかえりみる一方、年齢を超えて愛し合っていける状況を何とか取り戻したいというのが私の強い願いである。

最近私が手に入れた片山宏行『菊池寛の航跡—初期文学精神の展開』1997、和泉書院は菊池寛についてほとんど完璧な研究書である。

中国には杜甫の「貧交行」がある。

君見ずや管鮑貧時の交わり
(君不見管鮑貧時交)

斎の管仲と鮑叔のような、貧乏の中の立派な交わりを見るがいい。胸を打つ言葉である。だが続く言葉は厳しい。

此の道今人棄てて土の如し
(此道今人棄如土)

今の人は、だが、そうした道を土くれのように棄てて顧みない。
まるで現在の世の中みたいである。

ワシントンの一七八三年の手紙

True friendship is a plant of slow growth and must undergo and withstand the shocks of adversity before it is entitled to the appellation.

Washington—Letter, 1783

真の友情とは成長の遅い植物のようなものだ。数多くの逆境の衝撃に堪えてこそ、その名にふさわしいものとなるのだ。

この手紙の書かれた一七八三年といえば、独立戦争の終結した年であり、ジョージ・ワシントンがアメリカという国の最も偉大な人物として、軍籍を退き、マウント・ヴァーノンに戻った年である。

広津和郎のことなど

紅野敏郎編の広津和郎『同時代の作家たち』について宇野浩二は、「・・・・・・読んだ人は、

こうして私はやさしくお前も葉を
ベッドの上にまき散らそう
そこにはお前の仲間たちが
香りもうせて死に絶えている

間もなく私も後につづくことにしよう
友情も力を失い
愛の光かがやく環より
宝石は姿を消してしまう
真実の心がなえ
愛する仲間たちが飛び散ってしまう
この寒風吹きすさぶ世に誰か
ひとりきりでながらえようとするのか

“The Last Rose of Summer”

この詩はトーマス・モアの作である。わが国ではこの歌曲は「庭の千草」の名でひろく知られている。だが“Auld Lang Syne”とはいちじるしい対照をなしている。

モアが辿った運命のように、そこには悲しい調べがある。

私は幼いころ、何かの少年少女向きの音楽についての本の中で、亡き兼常清佐氏が、この歌の内容は、幼いみなさんにとっては堪えられない悲しみにみちたものであると語っていたのを、かすかに記憶している。

ある点アイルランド文学の底流をなす、哀愁を表しているものかも知れない。一方の“Auld Lang Syne”はスコットランド文学の基調をなすロバート・バーンズの明るさが窺えるものである。

貧 の 友

英語では A friend in need is a friend indeed という諺がある。韻を踏んでいるのも面白い。貧しい時の友こそ真実の友である、といった意味である。

The Last Rose of Summer.*

Thomas Moore.

Irish Air: "THE GROVES OF BLARNEY."

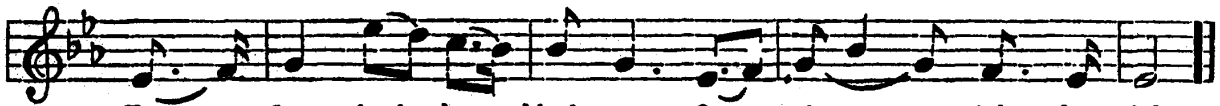
Flotow's "Martha."



1. { 'Tis the last rose of sum - mer, Left bloom - ing a - lone, }
All her love - ly com - pan - ions Are fad - ed and gone; }
2. { I'll not leave thee, thou lone one, To pine on the stem; }
Since the love - ly are sleep - ing, Go sleep thou with them; }
3. { So soon may I fol - low When friend - ships de - cay; }
And from love's shin - ing cir - cle The gems drop a - way; }



No flow - er of her kin - dred, No rose - bud is nigh,
Thus kind - ly I scat - ter Thy leaves o'er the bed
When true hearts lie with - ered, And fond ones have flown,



To re - flect back her blush - es, Or give..... sigh for sigh.
Where thy mates of the gar - den Lie scent - - less and dead.
Oh, who would in hab - it This bleak..... world a - lone!

ひとり残ったバラの花

トーマス・モア

ひとり咲き残った夏のバラ
友はすべて色あせ 姿を消してしまった
仲間の花はあたりに見当たらず
バラのつぼみもそうなのだ
自らの姿を反映させることもなく
溜息のみが残るだけだ

ひとり残ったお前が
茎にすがっているままにはしない
美しき友は眠りに入った
お前もそうするがいい

遠い昔

ロバート・バーンズ

昔なじみが、心に想い起こすこともなしに
忘れられてよいものだろうか
昔なじみが忘れられてしまっていいものだろうか

遠い昔のために 君よ
遠い昔のために 君よ
いざ友情の盃を
遠い、遠い昔のために

二人は丘の辺駆けめぐり
ひな菊の花を摘み取った
だがもっと長い年月
二人は辛い旅路をさまよった

われら二人は小川に遊び
朝より午後すぎまで時を過ごした
けどもっと長い年月の間
大海原が二人をさえぎった

わが信ずべき友よ
ここにわが手があり、君の手を求めて差し出すのだ
心ゆくばかり盃を傾けようではないか、君

君は君の大盃をとれ
われもまたわが盃をとり
古き友情の酒汲み干そう
過ぎし日の思い出のために

今村 試 訳

ている。ワイルドにはこうした愛、友情の悲劇が随分取り上げられている。

“What a silly thing Love is,” said the student as he walked away..... .

In this age to be practical is everything. I shall go back to Philosophy and study
Metaphysics.

大学生の自嘲が目に見えるようである。

二つの英詩にみられる友情

以下昔よりわが国で広く唄われて来た詩二編をとり上げて、そこに触れられている友情に触れてみたい。

AULD LANG SYNE

SHOULD auld acquaintance be forgot,
And never brought to min' ?
Should auld acquaintance be forgot,
And auld lang syne ?

For auld lang syne, my dear,
For auld lang syne,
We'll tak a cup o' kindness yet,
For auld lang syne.

We twa hae run about the braes,
And pu'd the gowans fine ;
But we've wander'd mony a weary foot
Sin' auld lang syne.

We twa hae paidled i' the burn,
From morning sun till dine ;
But seas between us braid hae roar'd
Sin' auld lang syne.

And there's a hand, my trusty fiere,
And gie's a hand o' thine ;
And we'll tak a right guid-willie waught,
For auld lang syne.

And surely ye'll be your pint-stowp,
And surely I'll be mine ;
And we'll tak a cup o' kindness yet
For auld lang syne.

Burns

会津に生まれ、会津に育った私などは、戊辰戦争がどのようなものであったか、幼いころから聞かされている。それだけに信じあえる友がいかに貴いものであるかを良く知っているつもりである。私たち大学という場での人間関係をしみじみ思う。教師として私たちは教え子に対して誇るべきものは何であるかを示さなければならないと思う。私たちは若い人々に真実に生きることを教えなければならない。

英語という言語を通し、さらにその言語で書かれた文学——イギリスのものにせよ、またアメリカのものにせよ——に依って私たちはそこに感得できるものを努めて教え子たちに伝えなければならないと思うのである。

オスカー・ワイルドは友情をどう考えたか

オスカー・ワイルドは多面性を持った作家である。「ドリアン・グレーの肖像」*The Picture of Dorian Grey*、などの大作はすぐ思いだされる。珠玉をちりばめられたような童話集の中のある作品は私共が幼いころから親しんで来ている。

イギリスを訪れると、ロンドンからほど遠くないレディングには、このワイルドが収容されていた牢獄がある。かれの「獄中記」(*De Profundis*)や「レディング刑務所の歌」(*The Ballad of Reading Goal*)などが思いだされる。

アンドレ・ジイドの回想記に依っても、私たちはカーネーションの花を胸につけ、パリの町を歩き廻った伊達男の姿が目浮かぶ。

ワイルドの生活について研究所として私が読んだものの中、リチャード・エルマンの「オスカー・ワイルド」*Richard Ellmann, Oscar Wilde*は非常にすぐれているように思われる。

私は、特に友情についてこの作家がどのように語っているかを、その作品について調べてみると、“*The Devoted Friend*”「献身的な友だち」という作品の主人公は結局人を裏切ることになっているのを知る。また同じ童話集の中の“*The Nightingale and Rose*”「夜鶯とバラ」の中の大学生は彼女が赤いバラを贈ってくれたら、彼の愛を受け入れるときいて、思い悩む姿が描かれている。冬のさ中に赤いバラなどとても手に入らないと悲しむ彼の姿に同情した夜鶯がバラのとげを自分の胸にさして、その血を吸わせる。そして鳥は死んでしまう。そういうこととは知らない学生が、朝目をさましてバラが赤い花を咲かせているのを見つけ、大よろこびで枝を切り取って彼女のところにとどける。しかし彼女はそんな花には見向きもしない。すっかりがっかりした大学生は「愛情なんてつまらないものだ。僕はやはり学問に戻って行こう」と決心する言葉で終わっ

友 情 と 文 学

——主として英米文学作品にみられる友情の探求——

今 村 泰 子

過日偶然の機会にNHK放映のドラマ、「細川ガラシャ夫人」をみた。そして彼女の父である明智光秀を想った。

戦国時代の武将が——大部分がそうであったと思うが、正妻のほかに側室をかかえていた折——光秀は妻のみを愛し、しかもその人が疱瘡のため二目と見られぬ顔になっても、離れるどころか、心を傾けてその人を労わりつづけた。

この光秀が本能寺において主君である織田信長を殺害したことにより、逆臣の汚名をきせられたことを私たちは日本の歴史を学ぶ間に聞かされてきた。では信長に忠義をつくした豊臣秀吉が正しい人であったかと言えば、私たちは首をかしげるのである。

明智光秀については吉川弘文館刊行の「人物叢書」の第一巻『明智光秀』の著者、高柳光寿氏は最後にこのようにのべている。

悲しき一生

光秀の伝記を書き終わってここに感慨なきを得ない一事がある。それは信長の行動を記さなければ彼の伝記が書けなかったということである。彼の行動は信長の意思によって制約されていた。彼は信長の命のままに動いていた。それは淋しいことである。完全に独立した人格の樹立。その企図が同時に死であった彼である。光秀がこのような悲しい運命をたどらなければならなかった社会、この封建社会が自由社会にまで発展するには、三百年の長い時日を要したのである。

高柳氏のこの言葉は私たちの胸に刺さる。特に、その信長の暴虐を散々聞かされている私たちには、彼に取り入るために手段を選ばなかった秀吉の卑劣さがよくわかるような気がする。この人物は友を裏切ることに何らためらうことがなかったような気がする。